

「富山の新米をどうぞ」



能登半島地震で甚大な被害を受けた石川県に隣接する富山県西部の高岡教区は昨年末、被災地支援プロジェクト「能登へ富山米を届けよう！」を実施、輪島市門前町の仮設施設で避難生活を送る人たちに富山の新米を届けた。

同教区では、災害救援活動専門委員会を中心に支援活動が続ける中で、地震で水田が被害を受けた上に、9月の収穫期には豪雨災害が重なり、米不足を心配する被災地の声を多く聞き、今回の支援を企画。12月9日から「支援米」の募集を呼びかけ、4日間で教区内の寺院や門信徒から1・2トの新米が寄せられた。事前に「12月19日に富山

高岡教区 輪島の仮設住宅で1.2ト配る

の新米を一軒ずつお伺いしてお配りします」というチラシを配布し、当日は同教区の森尾淳章教務所長と職員、仏教壮年会や仏教婦人会、寺族青年会の会員、僧侶など16人が、門前町諸岡地区にある道下仮設団地を訪問した。

「高岡の浄土真宗本願寺派から新米を届けに来ました。皆さんで食べてください。寒くなりますので、くれぐれもお体を大切にしてください」と声をかけながら一軒一軒を回り、3トごとに袋詰めした新米を手分けしながら363軒に届けた(写真)。また、同地域の約70軒にも配った。

新米には仏婦が「少しでも前に進めるように心を込

めて贈ります」などと手書きした手紙を添えた。配布に参加した男性は「お米を買う場所が近くにないそうで、とても喜んでいただけました。1月1日は皆さんにとって大変つらい日。じっと仮設で時間が過ぎ去るのを待つ皆さんには、お正月に富山の新米を召し上がっていただければうれしい」と語った。

同専門委員会の織田隆夫委員長(70、高岡市・長光寺住職)は発災直後から炊き出しなど支援活動をけん引してきた。「被災された方々は、帰る家があり、きちんと食事ができ、飲む水も整って初めてものを考える力や勇気が湧いてくる。自分で考え、自分で立つて歩こうとする勇気が湧き上がってくるその日まで微力ながら支えていき、日常の生活が整うまで継続してお手伝いさせていただきたい」と語った。